

# 思い出すこと

清水 光子

波のようにくりかえしおそってくる激しい機銃掃射の音がようやくやみ、しばらくしてサイレンは警報解除を知らせて鳴りひびきました。屋外は夕暮の色が濃くなっていき、室内は黒幕の中、燈火管制下で闇です。ここ、北海道旭川市、終戦の

のです。私はびっくりして、空を見ました。なる程いくつかの星が輝いています、と同時になぜかこの子は命が短いのではないかと……抱きしめてしまいました（そのNは五十歳をすぎず健在です）。

年の七月、疎開中のお寺の広間です。ふとんをうず高く積み上げて、その谷間に、そう、およそ二時間近く、三人の子ども達とじっと息をひそめていました。やがて、もう大丈夫だろうと窓の外をカーテンのすき間から見ました。その時、一緒に見ていたNが「あ、お星様がきれい」と叫んだ

空模様があやしいけれど、どうしても用事で三歳のTを連れて親しい老婦人を訪ねたのは八月も終わりに近くでした。用事をすませ四方山話をしているうち、やっぱり雷雨になり、外は夜のようになつくら、雷鳴といなづまが同時のようになり、はげしい雨が滝のように降っています。Tは

物も言わず私の膝にしがみついて、「はやくお家へ帰ろうよう」をくりかえします。老婦人は「もうじき止みますよ。ゆっくりなさいませ」と言いながら、お菓子やのみ物、古い絵本を見つけてきてなど優しく気遣って下さるのに、「ねえお家へ帰ろうよう」をくりかえしていました。でも思いの外早く雷鳴は止み雨も小降りになったのでお礼をいって辞去しました。畑の中の近道を我が家へ

急いで歩く途中、ふと見ると、東の空に何と、二重の虹が立っているではないか。「Tちゃん、あれ虹が出ているよ」と教えたたん、半べそで歩いていたのが立ち止まって、目をすえて眺めているのです。まるで根が生えたように、「さあもういそいで歩きましょう」と何度か手を引っばった揚句、その頃我が家で野宿することの厳しき、困難さが話題になっていたの「じゃ、Tちゃん、今日はここに野宿ね」と、言いましたら、Tは目がさめたようにびっくり顔をして私の手を握って

歩き出しました。この事は私がいつまでも後悔として心に残りました。

私が幼年期からずっと、大人になる迄住み暮していた家は東京の山の手の高台、崖の上に建っていて、東北側の縁側からずい分遠くまで（若い人はまさか？ と信じませんが）隅田川の花火まで見えました。関東大震災もこの家で逢いました。防風樹が植えられてもいないので暴風雨の時はその時の風向きでずい分と被害を受けました。雨戸をたてて、広い室に蚊帳を吊ってその中に食事などは持ち込んで（大ていおにぎり）すませたり。それがまるでおままごとのように楽しかった覚えがあります。が、庭の栗の木が倒れたり、柿の木がまだ小さい青い実をつけたまま折れたり、咲きはじめたばかりのおいらん草やひまわりが無残に倒れて悲しい思いをしました。幼い心に木や草も命がある、生きているという実感がうまれたよう

に思われます。ずっと後になって風で倒れた街路樹のすずかけを見て女の子が「木がかわいそう！泣いているよ」と言ったとき、ぐっと共感を覚えました。

関東大震災の時、長兄（旧制高校生）がこの家の居間の鴨居をずっと両手で支え持ち上げていた姿が今でも目に浮かびます。その頃五歳位だった妹は「お家が倒れなかったのは大兄ちゃんが支えていたから」と大きくなる迄信じていました。ギリシャ神話の、大地を支えるアトラスのように思えたのかもわかりません。

高台に建っているこの家は水害を受けたことはありませんが、よく買物や散歩した神田川べりは少し大雨が降ると氾濫しました。舟で往来すると聞くと、それを見たいと母にせがんで叱られました。その大水が引いたと聞き、兄達二人が探検に行くというので、こっそりついていき、まだどす黒い水が所々小さな渦巻を作って流れていく上に

一本橋がかかっている、そこを渡って土手に上がったのですが、その目くるめくような緊張感、充実感は今なお鮮かによみがえります。

終戦間もなくキャサリン台風（？）が関東地方をおそいました時、東南に向いた我が家はもろに暴風雨を受けました。広縁の欄間のガラスがアッと言う間に吹き破られ、広縁はガラスの破片と雨水で一ぱいになり、雨風は容赦なく吹き込んでくる。その時、老父が板切れを見つけて来て、ゴム長のまま広縁に上がって高い欄間に打ちつけました。それを四歳のTは泣きそうな声をはり上げて「おじいちゃん、やめて！」と叫びましたが、父は無事に板をうちつけました。ぬれた服を着替えて座った父のひざにTは安心したように抱かれて、嵐の収まるのを待ったことでした。

阪神大震災に逢われた作家の藤本義一氏が震災直後、娘さん一家の安否をたしかめようとその住まいを訪ねられたときの文章に「マンションは幸い

無事…中略…四歳の孫娘は「おじいちゃん！」と声をあげた。どうだった、と尋ねると「お家がいよいよしたよ。いろんなものがワッショイワッショイしたよ」と、答えた。自分も物書きとしてその表現には感心した」と、なお「その途中で野良犬の群れが大きなリーダー格の犬を先頭に、人の流れと反対に大阪の方へ行くのに逢った。自宅に帰ると庭にさまざまな鳥が集まっているのに驚かされた」と。

幼児は未分化と言われます。たしかに体力や知識は大人に及ばない。でも何かしら動物的ともいえるような、大人たちがいつのまにかどこかへ落とし、失ってしまったものをもっていて、それを大人が、たよりになるたくましい大樹のようにある安定した環境をつくれれば実に素直にそこに順応し、さまざまな表現もするのではないでしょう。しかも見事な回復力を発揮するエネルギーが豊かで「自然と一致する」とはこのような意味も

あるかしら。

関東大震災のあと、お茶の水幼稚園の焼跡に立たれたときの倉橋惣三先生の「焼跡に立ちて」と「大災と幼児教育」をよみかえし四分の三世紀を経た今にして、少しもかわらない、というより当然と思える大人の子どもへの持ちたいねがい、あり方を教えられたことです。

(音羽幼稚園)

